小樽商大 ビジネス・ワンポイント

「地場銀行業の消長と小樽経済（前編）」

小樽商科大学ビジネススクール　齋　藤　一　朗

「本行小樽出張所ヲ小樽支店ト又北海道支店ヲ函館出張所ト改称シ札幌出張所ハ本月十九日（注：1906（明治39）年８月）限閉鎖シタリ北海道ニ於ケル経済上及金融上ノ勢力ハ漸次小樽ニ移リ函館ハ稍其重要ノ度ヲ減スルニ至リ…」『日本銀行沿革史』第一巻、1913（大正２）年）。

1869（明治２）年、明治天皇が蝦夷地開拓の御下問書を下付して以来、北海道の開拓は函館をいわば策源地として進められてきた。金融面においても、1878（明治11）年に第百十三国立銀行が設立された。第百十三国立銀行は、北海道に本店を構える初の銀行であり、同行の設立を嚆矢として、水産業あるいは商業への資金供給が制度的に整えられてきた。

1893（明治26）年、第百十三国立銀行は小樽に支店を開設した。明治26年下半期考課状には、「小樽地方一般ノ状況タル人口ノ移植貨物ノ集散歳ヲ逐フテ開進ノ兆勢アレバ業務ノ如キモ亦漸次増加スヘキヲ信ス」とあり、小樽経済の将来性を見越しての支店開設であったことがうかがわれる。当時の小樽はニシン漁で活況を呈する一方、奥地開発の要衝として各種の交通網が整備されてきた。1874（明治７）年には小樽～札幌間の国道が開通し、翌1875（明治８）年には開拓使附属船による東京～函館～小樽間の定期航路が開かれた。さらに、1880（明治13）年には、郵便汽船三菱会社が函館～小樽間の定期航路を開設し（９月）、11月には官営幌内鉄道（手宮～札幌）が開通した（手宮～幌内間の全線開通は1882（明治15）年）。

こうした海陸交通網の整備は、小樽を起終点とする旅客や貨物の集散を盛んにするとともに、陸海運業や倉庫業、あるいは商業の発展を促した。ヒトやモノが集まれば、カネや情報も集まる。実体経済の発展と表裏を為すかたちで、銀行業もまた小樽に集積した。第百十三国立銀行（1897（明治30）年に普通銀行へ転換、百十三銀行に改称）の小樽進出も、実体経済面での動きに添うものであり、北海道経済の重心が函館から小樽へと遷移してきたことによる。冒頭に掲げた『日本銀行沿革史』の記述も、このことを端的に物語っている。北海道の開拓が内陸部へと及ぶにつれて、あるいはまた、交通機関や交通網の発達が隔地間の時間距離を縮減するにつれて、策源地に集積された諸機能も流動する。小樽経済の隆盛はまさに、そうした時代の移ろいの中でもたらされてきた。

第百十三国立銀行が小樽支店を開設した直後の1894（明治27）年、後志國は余市町に一つの銀行が誕生する。余市銀行だ。余市銀行は漁業金融と地場産品の商流に伴う資金供給を主たる業務とする傍ら、銀行業から得た利益を元手に、赤井川の山林原野の開墾を目的とする余市開墾株式会社をいわば周辺業務として営んでいた（『北海道銀行創立三十年記念誌』1924（大正13）年）。銀行設立の翌年、1895（明治28）年には小樽支店を開設し、1897（明治30）年には本店を小樽に移転した。小樽での支店開設や本店移転に関しては、その事情が詳らかではないが、本店移転の際には、資本金をそれまでの10万円から50万円に増やし、商号も小樽銀行へと変更した。経営陣にも設立時の漁業者（余市郡在住）に加えて、小樽の財界人がその名を連ねるようになり、同行の本店移転が業容の拡大を企図したものであることがうかがえる。

第百十三国立銀行の小樽支店開設と、余市銀行の本店移転と小樽銀行への商号変更は、それぞれの出自こそ違え、小樽が経済的に枢要な地位を築きはじめたことと軌を一にする。この後、両行は1928（昭和３）年に合併することとなるが、そこに至る歩みと小樽経済との関わりについては、次回まで取っておくことにしよう。